

パフォーマンス評価におけるフィードバックのあり方に関する一考察 —中学校社会科の実践に焦点を合わせて—

A Study of Feedback in Performance Assessment: A Focus on Social Studies in Secondary Education

奥村 好美* 宮田 佳緒里*
OKUMURA Yoshimi MIYATA Kaori

本稿は、「真正の評価」論にもとづくパフォーマンス評価の実践において、いかに学習者の「参加」の途を開くことができるのかについて、そのあり方の一端を明らかにすることを目指すものである。そのため、まず、「真正の評価」論を提唱したウィギンズが、「真正の評価」論や、それにもとづくパフォーマンス評価についてどのように述べているかを確認した上で、学習者の自己評価や自己調整を促すフィードバックについてどのように語っているのかを明らかにした。その結果、フィードバックを実施する際の留意点は、次の4つに整理された。1つめは、フィードバックを単なる賞賛や叱責、ガイダンスとは区別して、学習者の行動がどのような結果となったかを具体的に伝える形で行うことである。2つめは、フィードバックはパフォーマンスの後のみでなく、過程においても行うことである。一度限りの事後の評価ではなく、フィードバックを活かして子どもたちが繰り返し自己調整できるように長期的に評価を行うことが求められている。3つめは、スタンダードやモデルを提示することである。4つめは、子どもたちの学習を型にはめないよう、他者の心をゆさぶるような印象深さを重視して評価を行うことである。次に、フィードバックを意識しつつ、生徒の自己評価や相互評価を取り入れて筆者が行った中学校社会科地理的分野でのパフォーマンス評価の実践に焦点をあてて、検討を行った。それにより、大学教員による飛び込みでの小単元の授業であるという制約はあったものの、フィードバックを実施する際の留意点を意識した授業の1つのあり方を提起できた。最後に、多くの学習者に「質」の高い学びを保障するためには、自身の学習の状況を具体的に把握し、自己評価や自己調整につなげていけるようなフィードバックを継続的に行うことが重要であることを指摘した。

キーワード：パフォーマンス評価、フィードバック、自己評価、相互評価、社会科

Key words : Performance Assessment, Feedback, Self-Assessment, Peer Assessment, Social Studies

はじめに

次期学習指導要領改訂に向けて出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」¹によれば、育成を目指す資質・能力を次の三つの柱として整理している。それは、①何を理解しているか、何ができるかといった知識・技能、②理解していること、できることをどう使うかといった思考力・判断力・表現力等、③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかといった学びに向かう力・人間性等である。そして、これら資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくための方策として、パフォーマンス評価などを取り入れることが推奨されている。パフォーマンス評価とは、「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような評価方法の総称」²である。

このように近年、日本においてパフォーマンス評価に対して注目が集まっている³。これは伝統的なテストなどの評価のあり方では捉えることが難しい高次の能力を目標に据え、それを評価で捉えようとするためであると

いえよう。つまり、目標・評価の「質」を追求した結果として、パフォーマンス評価が着目されているといえる。

実は、日本に紹介されるパフォーマンス評価の多くは、「真正の評価」論を背景に持つ。「真正の評価」論は、もともと1980年代後半のアメリカで、効率性や説明責任（accountability）の要請が強まる中、伝統的な標準テスト（standardized test）が多用されることに対する批判を受けて提起されてきたものである。この「真正の評価」論は、これまでの日本の「目標に準拠した評価」を向上させるために、田中らによって日本に紹介されてきた⁴。ここで、注目しておきたいのは、「真正の評価」論は「質」と「参加」という点で従来の「目標に準拠した評価」を一層充実させることが期待されている点である。

実際、アメリカで「真正の評価」論を提唱したウィギンズは、「評価の目的は、主として生徒のパフォーマンスを教育し改善することであり、単に検査することではない」⁵と繰り返し述べる。そして、評価が教育的であるためには、①真正の課題を用いることと②生徒や教師が、（同様の）課題でパフォーマンスを修正するために

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース 講師

平成29年4月24日受理

すぐに使えるようなフィードバックや、それにもとづいて修正する機会を提供することの2つが必要であるという⁶。すなわち、「真正の評価」論では、学力保障を根底に抱きつつ、評価課題を真正にすることとともに、学習者が自己評価や自己調整を行いながら学習を改善していけるようなフィードバックを行うことが求められている。ここには、明らかに評価課題の「質」だけでなく、自己評価や自己調整を通じた学習者の評価への「参加」の視点も重視されていることが見てとれる。

学習者の「参加」のあり方について、日本では、ポートフォリオ評価法に関して、検討会という場で具体的にいかに子どもの参加を保障しうるかなどが西岡らによって研究されている⁷。パフォーマンス評価に関しても、ルーブリックを共有して自己評価等に取り組みせるあり方が提言・模索されている⁸。しかしながら、ポートフォリオ評価法と比べるとパフォーマンス評価に関しては、具体的にいかに授業の中で学習者の参加を保障できるかといった点については、未だ明らかにされていない点も多いといえよう。

この要因の一つには、「逆向き設計」論というカリキュラム設計論を用いてパフォーマンス評価をカリキュラムに位置付けた場合、そこでのパフォーマンス評価はある種総括的な評価として捉えられがちとなることがあるように思われる。総括的な評価と捉えられると、評価後の学習者の活動は考えにくくなり、「参加」の場が保障されにくくなるだろう。もちろん、「逆向き設計」論を日本に提案する西岡らはパフォーマンス評価における「参加」の重要性について各所で述べている⁹。しかしながら、「逆向き設計」論が、目標と対応した評価方法を指導の前に計画することを求める以上、そこでの評価が総括的な評価として捉えられがち側面はあるだろう。その場合、そこから次の学習へいかにつなげるかについては、考慮されにくくなるように思われる。

そこで、本稿では、パフォーマンス評価の実践においていかに学習者の参加の途を開くことができるのかについて、そのあり方の一端を明らかにすることを目指したい。具体的には、まず、ウィギンズが「真正の評価」論やパフォーマンス評価についてどのように述べているかを確認した上で、学習者の自己評価や自己調整を促すフィードバックについてどのように語っているのかを明らかにする。次に、生徒の自己評価や相互評価を取り入れた中学校社会科地理的分野でのパフォーマンス評価の実践に焦点をあてて、検討を行う。それにより、学習者が教育評価へ参加するあり方についての示唆を得たい。

1. 「真正の評価」論における学習者の「参加」

1-1. 「真正の評価」論とパフォーマンス評価

ここでは、ウィギンズが「真正の評価」論や、それに

もとづくパフォーマンス評価についてどのように述べているかを確認しておきたい。ウィギンズによれば、評価の課題が「真正」であるためには、次の6つのスタンダードを満たしていることが求められる¹⁰。①現実世界の状況を組み込んだ課題、②判断や革新を求める課題、③生徒が教科「する」ことを求める課題、④仕事場や市民生活、私生活の場で大人が「試されている」文脈を模写したりシミュレートしたりする課題、⑤複雑な課題を切り抜けるために、生徒が様々な知識やスキルをいかに効率的かつ効果的に利用しうるかを評価する課題、⑥テスト問題を秘密にするのではなく、生徒たちが予行練習をし、実践し、リソースを調査し、フィードバックを得る機会を提供して、パフォーマンスと成果物を精練できるような課題である。

このように、評価課題が「真正」であるためには、現実的な状況を組み込み、大人が「試されている」文脈の中で、生徒が様々な知識や技能を使いこなせるかを評価する課題であることが求められている。ウィギンズは、こうした課題をしばしば（真正の）パフォーマンス課題と述べる。

1つパフォーマンス課題の例をあげてみたい。これは、アメリカの歴史・地理の第6～8学年用のパフォーマンス課題の例である（表1）。課題を見ると、実際におこりそうな文脈が設定され、生徒たちがこれまでに学んできたヴァージニア州の歴史や地理の知識やスキルを活かして取り組めるようになっていることがわかる。

表1 歴史・地理のパフォーマンス課題例¹¹

山々から海岸へ。9人の外国人生徒のグループが、国際交流プログラムの一環として1カ月間あなた方の学校を訪問します（心配は要りません、彼らは英語を話します！）。校長先生があなた方のクラスに、4日間のヴァージニア旅行の計画と予算を立てるよう頼みました。旅行計画は、ヴァージニア州が私たちの国の歴史と発展にどのような影響を与えたのかについて、訪問者が理解するのを助けるようなものでなければなりません。訪問者が、ヴァージニア州が私たちの国の発展にどのように影響したのかを最もよく把握できるような場所を見ることができるよう、旅程を計画しなさい。あなたの課題は、それぞれの場所がなぜ選ばれたのかについての説明を含んだ旅程を筆記された形で用意することです。4日間の旅行の道筋をたどる地図と、旅行の予算も含めて用意しなさい。

ただし、ウィギンズらは、パフォーマンス課題だけをもって学習者の評価とすることを主張していた訳ではない。ウィギンズらは「効果的な教師－評価者は、指導の最後に1種類の単一のテストを用いるよりも、途中でさまざまな方法と形式を用いてたくさんの証拠を集める」¹²と述べている。これは、理解の評価には長期にわたる証拠の収集物が必要であるという考えにもとづく。

そのため、授業中の発問や観察といったインフォーマルな理解の点検、伝統的な小テストやテスト、単に知識を再生するだけでなく、批判的に考えて取り組むことを求めるようなオープンエンドの課題（アカデミック・プロンプトと呼ばれるミニ・パフォーマンス課題のような課題）などをパフォーマンス課題とともに用いることが推奨されている。これらは、個別バラバラに行われるのではなく、山場となるパフォーマンスに貢献するような本質的な知識とスキルを評価することによって、全体像を仕上げるために位置付けられる。

そして、これらの評価は、あくまでも生徒の学習の改善に焦点を合わせることを求められている。先述した評価課題が「真正」であるための6つのスタンダードに立ち戻ってみると、評価課題に生徒たちが取り組む際には、生徒たちがフィードバックを得てそれをもとに自身のパフォーマンスや成果物を改善していけるような機会を提供することがあわせて求められていることがわかる。教育評価は、子どもの学習の単なる検査ではなく、学びの場として位置付くべきであるとされているといえよう。

1-2. 「真正の評価」論におけるフィードバック

ここでは、ウィギンズがフィードバックに関してどのように捉えていたかを明らかにしたい¹³。ウィギンズによれば、「最良のフィードバックは、実際に結果として生じたことを、とても具体的に、直接的に、もしくは記述的に明らかにするものであり、パフォーマンスを行う者（筆者注：学習者）にとって明快で、具体的な目的とスタンダードといった観点から利用可能であったり、与えられたりする」¹⁴ という。つまり、点数やABCなどの記号だけのフィードバックや、「よくできました」「頑張ろう！」といった曖昧な用語でのフィードバックではなく、学習者が具体的な評価規準・基準をもとに自らの学習状況が理解できるようなフィードバックが求められていることがわかる。

さらに、よくある誤解として、フィードバックとガイダンス（支援）（guidance）が混同されがちであることが指摘されている。ウィギンズは、ガイダンスとフィードバックが、学習者が自己調整を行うために互いに補い合うことを認めつつも、この2つを明確に区別している¹⁵。フィードバックは、学習者の行動の効果についての情報であり、それにより学習者は自分の行動がどのような結果となったかを具体的に知ることができる。それに対し、ガイダンスは方向性を示し、その状況を改善するための方法を教えてくれるものであるという。

ガイダンスとフィードバックの違いを示すために、ウィギンズは車の運転の例をあげている¹⁶。例えば、ニューヨークからカリフォルニア州のサクラメントまで車で行くとする。運転手はこれまでそうした経験はなく、適切

なルートもほとんど知らない。そうした中、もっとも短い時間で安全にたどりつけるルートを選ぶことが求められている。ここで、ガイダンスとは行き方を示してくれるものである。典型的なものとしては、地図があげられる。それも単なる地図ではなく、自分用にカスタマイズされたものに、間違いやすい交差点で混乱しないように自動車協会の人に黄色マーカーでルートに記をつけてもらった地図などがあれば、かなり助けになるだろう。しかし、地図、つまりガイダンスだけでは十分ではない。旅行者として、自分が正しく地図通りに進んでいっているのか、少なくとも正しい方向に向かっているのかを知る必要があるためである。これがフィードバックである。典型的なものとしては、道路標識があげられる。道路標識がなければ、自分が（地図の）どこを走っているのかわからず、ガイダンス（つまり地図）は意味をなさない。場合によっては、道路標識は進むべき道（ガイダンス）を提供することもあり、フィードバックとガイダンスは密接に結びついている。しかしながら、これらが混同され、ガイダンスしか与えられないと、学習者は自分の居場所がわからず、必ずしも正しい方向へ進めるとは限らなくなる。つまり、ウィギンズは、フィードバックとガイダンスを混同してしまうと適切なフィードバックが学習者に与えられない危険性があることを危惧しているといえる。これを回避し、フィードバックを確実に行うことで、学習者の自己評価力の向上や学習者自身による自己調整を促すことが求められている。

こうしたフィードバックについて、ウィギンズは、2種類必要であると述べている。それは、パフォーマンスの「後」に行われるフィードバックと、評価活動を行っている「過程」で行われるフィードバックである。前者だけでなく後者の「過程」で行われるフィードバックが必要な理由についても運転の例から自明である。ニューヨークからサクラメントまで向かう間に、道路標識は必ず繰り返し定期的に必要であるためである。1回限りの事後の評価とフィードバックではなく、繰り返し長期的に評価を行い、それをフィードバックすることが求められていることがわかる。

学習者が自己評価や自己調整を行うためには、学習者が目指すべき所分かっていることも重要である。フィードバックによって得られた自分の行動の結果を、目指すべき所との間のズレを埋めるために用いてはじめて学習者は自己調整を行うことができる。この目指すべき所として、学習者に達成してほしいスタンダードと、それを具体的に示すモデル（model）を学習者と共有することが重要であるとされている¹⁷。学習者は、モデル—練習—パフォーマンス—フィードバック—パフォーマンスといったサイクルを通じて、卓越していくという。ただし、モデルを示すことに関しては一般的に次の2つの懸念があ

るとされる。1つめは、あまりにレベルの高いモデルが示されると、生徒たちは落ち込んだり、気力を削がれたりするのではないかという懸念である。それでも、模倣や分析のためのモデルを定期的に学習者に提供することの価値を考えれば、モデルは示される必要があるとされる。2つめは、学習者の創造性に富んだ才能を抑制してしまうのではないかという懸念である。これに関しては、モデルを1つとするのではなく、複数の多様なモデルを提供することが推奨されている。

ただし、これらのスタンダードやモデルが学習者を型にはめてしまわないようにするためには、形式面等を過度に重視することなく、他者の心をゆさぶるような印象深さ(impact)をあわせて求めていくことが重要であるという。生徒のパフォーマンスにおいて重要なことは、例えば聴衆を説得したり、顧客の要求を満たしたり、問題を解決したりするための力であり、効果を達成することである。ここに、印象深さが関わる。学習者のパフォーマンスが単なるモデルの表面的ないし機械的な模倣になり、学習者の創造性を喪失させてしまうことを防ぐためにも、印象深さは強調される必要がある。

以上より、フィードバックを実施する際には、主に次の4つに留意することが必要であるといえる。1つめは、フィードバックを単なる賞賛や叱責、ガイダンスとは区別して、学習者の行動がどのような結果となったかを具体的に伝える形で行うことである。2つめは、フィードバックはパフォーマンスの後のみでなく、過程においても行うことである。一度限りの事後評価ではなく、フィードバックを活かして子どもたちが繰り返し自己調整できるように長期的に評価を行うことが求められている。3つめは、スタンダードやモデルを提示することである。4つめは、子どもたちの学習を型にはめることなく、他者の心をゆさぶるような印象深さを重視して評価を行うことである。それでは、これらの提起を踏まえて行われたパフォーマンス評価の実践について、続いて検討してみたい。

2. 自己評価や相互評価を取り入れたパフォーマンス評価の実践

2-1. 実践概要

本実践は、筆者らが、2016年10月3日～12日に兵庫県内のA中学校第2学年で行ったものである¹⁸。社会科地理的分野の中国・四国地方という小単元での実践である。本実践にあたっては、前節で述べたフィードバックを実施する際の4つの留意点を意識した。

それでは、本小単元の概要を見ていきたい。まず、目標は表2のように重点目標と知っておく価値がある知識・技能に分けて考えた。重点目標における「本質的な問い」として、地域の特色や問題、その解決策を問うような視

表2 小単元の目標

<p>重点目標</p> <p>「本質的な問い」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（人口や都市・村落問題を中核として考えると）中国・四国地方の特色や問題はどのようなものか。 ・（人口や都市・村落問題に関わる）中国・四国地方の問題を解決するためにどのようなことが考えられるか。 <p>「永続的理解」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・瀬戸内海をめぐる交通網により九州・近畿とつながる瀬戸内は人口も多く、工業化も進んでいる。山に隔てられた、山陰や南四国は、気候や自然条件を活かして、主に農業・漁業を行っている。しかしながら、これらの地域における人口の偏りは都市部の過密化・農村の過疎化といった問題を引き起こしている。 ・人口の偏りによる問題解決をしようとすると、地域の固有の特徴や良さを活かして、過疎地域では町おこし・村おこしをすること、過密地域では再開発を行うことが求められる。いずれにおいても、人の動きの流れをスムーズにし、活発化することが問題解決の鍵の一つとなる。
<p>知識・技能</p> <p>知識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域や山地の名称（山陰地方など） ・各地域の特徴（瀬戸内工業地帯など） <p>技能</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国・四国地方の雨温図、人口分布図などの図表を読み取ることができる

点で構成したのは、他の地域学習を行う際にも、学習者が同じ視点を活かして学習に取り組めるようにすることをねらったためである。これにより、フィードバックがその他の単元にも長期的に活かされるようになることを目指した。

目標に対応する具体的な評価方法に関しては、重点目標である永続的理解を評価するための課題として表3のようなパフォーマンス課題を位置付けた。パフォーマンス課題では、生徒たちにA広島市もしくはB高知県を選ばせた。そして、それぞれA広島市であれば市長に、B高知県であれば県知事に頼まれて、それぞれの自治体の特徴や問題点を踏まえて、住みやすくするためのアイデアを考えさせる課題とした¹⁹。このような形で、現実的な状況を組み込むことに努めた。ただし、小単元での実践であり、様々な知識や技能を使いこなせるほどの複雑さが必ずしも十分でないことから、先述したウィギンズらが述べるアカデミック・プロンプトにあたるようなミニ・パフォーマンス課題であると捉えられる。知識・技能については、中間テストにおける筆記試験で評価を

行った。

表3 パフォーマンス課題

<p>広島市・高知県を住みやすくするためのアイデアを考えよう！ あなたは（A：広島市の市長・B：高知県の知事 ※選択）に頼まれて、もっと（A：広島市・B：高知県）を住みやすくするにはどうすれば良いか、アイデアを出すことになりました。広島市の市長は過密問題、高知県の県知事は過疎問題で困っています。学んだことを活かして、あなたの考えをレポートにまとめましょう。その際に、次の①～③を必ず入れましょう。 ※写真や資料を引用または貼り付けても構いません。 ①（A：広島市・B：高知県）の自然や産業などの特徴 ②（A：（広島市）過密問題・B：（高知県）過疎問題）により、どんな困ったことがおきているか ③の問題を解決するための具体的なアイデア、そのアイデアによってどんな良いことが期待できるか</p>
--

この課題に取り組ませる際には、生徒たちが自由に資料を使えるように、切り貼り可能な資料教材プリントを用意した。このプリントには、それまでの第1時、第2時の授業で用いた雨温図や中国新聞の切り抜き、写真資料などに加え、広島市・高知県以外の自治体が過疎・過密対策のために行っている取り組みに関する資料を掲載した。こうして、生徒が写真や資料をレポートに取り込みやすくなった。また、パフォーマンス課題に取り組むまでの授業では、筆者らが用意した資料や教科書を生徒たちが資料として引用しながら、概念探究できるような授業を実施した。こうして、資料教材プリントに掲載されていない教科書（『新編 新しい社会地理』東京書籍）や資料集（『アクティブ地理総合』浜島書店）、さらには追加で自身で調べたことをも生徒たちが根拠としてレポートに掲載できるようにした。

なお、今回のパフォーマンス課題に関しては、本来、過疎・過密問題という大人でも解決困難な問いに対して、安易な解決策で学習を終えることは避けるべきであるとの見方もあるだろう。しかしながら、今回の授業は、大学教員による筆者らの飛び込み授業であり、また生徒たちはパフォーマンス課題のような課題に取り組むのが初めてであった。このことから、今回は不慣れな課題に取り組むという生徒たちの現状を考え、学んだことを活かして問題解決のあり方を自分なりに考えられるという所をゴールとした²⁰。

表4 単元「中国・四国地方」の流れ（全4時間）

<p>①中国・四国地方の地域区分と広島の高知の過疎問題及び問題解決に向けた取り組み事例 ②高知の過疎問題及び問題解決に向けた取り組み事例 ③パフォーマンス課題の実施 ④課題交流と振り返り</p>
--

単元の流れは表の通りである。第1時、第2時は、本来第2学年社会科を担当している教員の授業形態を参考にし、概念探究型の授業を実施した。その上で、第3時に教室でパフォーマンス課題に取り組ませた。ただし、第3時の時間に課題が終わらなかった生徒には、第4時までに自宅で仕上げてくるよう求めた。そして、第4時を生徒たちが作成した課題を相互評価するとともに、自己評価を行う時間として位置付けた。

2-2. フィードバックのあり方の模索

ここでは、第3時、第4時の授業の様子を検討してみたい。まず、第3時である。第3時においては、導入で第1時、第2時の内容の復習を行い、広島市の過疎問題、高知県の過密問題の特質をおさえた。そして、パフォーマンス課題の提示を行い、先述した資料教材プリントを配布した。その上で、「良いレポートってどんなレポートやと思う？」と問いかけた。普段、生徒たちはあまりレポートなどを書いた経験がなかったことから、ほとんど良いレポートのイメージを持っていないようであった。そのため、教師側から①具体的、②根拠がある、③つながりがあるという3つの観点を、例をあげながら提示し、生徒たちと評価基準の共有を行った。ここで、ループリックを示すのではなくこの3つの観点を共有したのは、筆者らが、生徒たちが課題に「具体的かつ論理的」に取り組めばループリックで高い評価となるだろうという見通しを持っており、それを生徒にわかりやすい言葉を使って3つに整理するとこのようになったためである。

その後、生徒たちは各自でパフォーマンス課題に取り組んだ。この時、筆者は、机間指導をしながら、手が止まっている生徒などを中心に、いわゆる支援に加えてウィギンズが述べるような具体的・記述的なフィードバックを行うよう心がけた。

例えば、生徒Aは、パフォーマンス課題に取り組み始めて間もなく「先生できた」と声をかけてきた。しかしながら、そこでの生徒Aの作品は短文の羅列で断片的であった。ただし、問題解決のためのアイデアとして、古民家カフェで茄子を使った料理を出すといったことは記すことができていた。そこでアイデアの良さを指摘した上で、古民家である理由、茄子を使った料理を出す理由をともに確認した。そこには、レポートに記入はされていなくとも、第1時、第2時の授業で生徒が学んだ高知県では人口が減少して問題となっていることや、促成栽培で茄子を栽培していることなどが根拠としてあった。そこで、生徒Aに、それらの根拠は言葉で書かなければ、伝わりにくいのではないかとということに気づかせるようにした。このように、単なる称賛や叱責ではなく、良いレポートのための観点のみを示すのではなく、生徒たちに自身の作品の状況を具体的に伝えるよう心がけた。

次に、第4時の授業である。第4時の授業では、生徒たちを3～4人のグループに編成した。グループにはできる限り、広島市を選んだ生徒と高知県を選んだ生徒の両方が入るようにした。その上で、再度、良いレポートのための3観点①具体的、②根拠がある、③つながりがある、を全体で確認し、板書した上で、グループで相互検討を行うようにした。こうした活動に慣れていない生徒の現状をふまえ、粗探しにならないよう、できるだけ作品の良いところを見つけるように促した。

グループでの相互検討後、クラス全体に対して数人の生徒に作品を発表させた。それにより、全体で広島市や高知県の地域の特徴や、(過密や過疎によって生じる)問題、多様な解決策を共有した。その上で、生徒たちの作品をもとに、過疎問題や過密問題を解決するポイントの1つに人の移動の活性化があることを一斉指導で確認した。良いレポートとするための3観点をふまえたレポートになっていれば、きっとどのレポートにも人の移動の活性化が現れているはずだということを伝え、授業の最後に生徒一人ひとりに自己評価を行わせた。

2-3. 生徒の作品分析

生徒の作品を分析するにあたっては、授業後に生徒の作品をもとに筆者ら及びA中学校第2学年社会科を担当している教員とともにループリック作りを行った。作成したループリックは表の通りである。

ここで、ループリックにもとづき、2人の生徒の作品を見てみたい²⁾。1人目は、前節の机間指導中のフィードバックの事例で取り上げた生徒Aの作品である。第3時においては、短文の羅列であったが、最終的な作品では、資料が使われていることがわかる。作品に使われている資料は、第1時・第2時で利用した資料の一部で、切り貼りしても良い資料教材プリントとして生徒たちに配布していたものである。フィードバックをもとに、茄子の東京への月別入荷量のグラフを示すことで、古民家カフェで茄子を使った料理を出す根拠を具体的に示そうとしたものと考えられる。高知県が抱える問題として、人が少なく、学校や病院の数が減っていること、特徴として冬に東京への茄子の月別入荷量が高くなっていること、解決策として古民家カフェで茄子を使った料理を出すことなどが考えられている。

しかしながら、短文の記述である点は第3時の時のままである。第3時において、生徒たちが作品に取り組む過程でフィードバックを行うことに努めたものの、生徒Aのように、地域の特徴・問題・解決策は考えられていても、それぞれのつながりや根拠がレポートの読み手に伝わりにくい作品は少なくなかった。この背景には、そもそもレポートとは何かということや、筆者らが伝えた良いレポートとするための3観点が生徒たちに十分に伝わっていなかった可能性があることが考えられる。

加えて、この課題は、広島市の場合は市長、高知県の

表5 ループリック

	地理的な事象に関する思考力・判断力・表現力	資料活用の技能
5	広島市・高知県の地域の特徴を、自然や産業など複数の視点から表わしている。そして、広島市の過密問題や高知県の過疎問題がなぜ生じているのかについて、その地域の特徴と関連づけて考えられている。さらに、それらの問題により、どのような困ったことが生じているのかについて、具体的に記すことができている。その上で、地域の特徴をふまえて、筋道を通った建設的な問題解決の在り方を複数考えており、他地域の取り組みを活かしたアイデアや独自のアイデアも含まれている。	レポートの内容に最適な資料を複数選び、それらを関連づけて説明しており、相手に伝わりやすい非常に説得力のある論述を行うことができている。
4	広島市・高知県の地域の特徴を、自然や産業など複数の視点から表わしている。さらに、それらの問題により、どのような困ったことが生じているのかについて、具体的に記すことができている。その上で、筋道を通った建設的な問題解決の在り方を考えている。その過程で、広島市の過密問題や高知県の過疎問題がなぜ生じているのかについて、その地域の特徴と関連づけて考えられていたり、地域の特徴をふまえた問題解決の在り方を考えていたりするなどの関連づけが見られる。	レポートの内容に適した資料を複数選び、説得力のある論述を行うことができている。
3	広島市・高知県の地域の特徴を表わしている。そして、広島市の過密問題や高知県の過疎問題により、どのような困ったことが生じているのかについて記すことができている。その上で、建設的な問題解決の在り方を示している。	基本的な資料を用いて、説明している。
2	広島市・高知県の地域の特徴、広島市の過密問題や高知県の過疎問題、問題解決の在り方のうち、いずれかが含まれていない。単語の羅列などとなっており、レポートとして形になっていない。	資料を用いて説明しているが、内容と関連づけて活用することができていない。
1	レポートが未完成もしくは白紙である。	資料を用いることができていない。

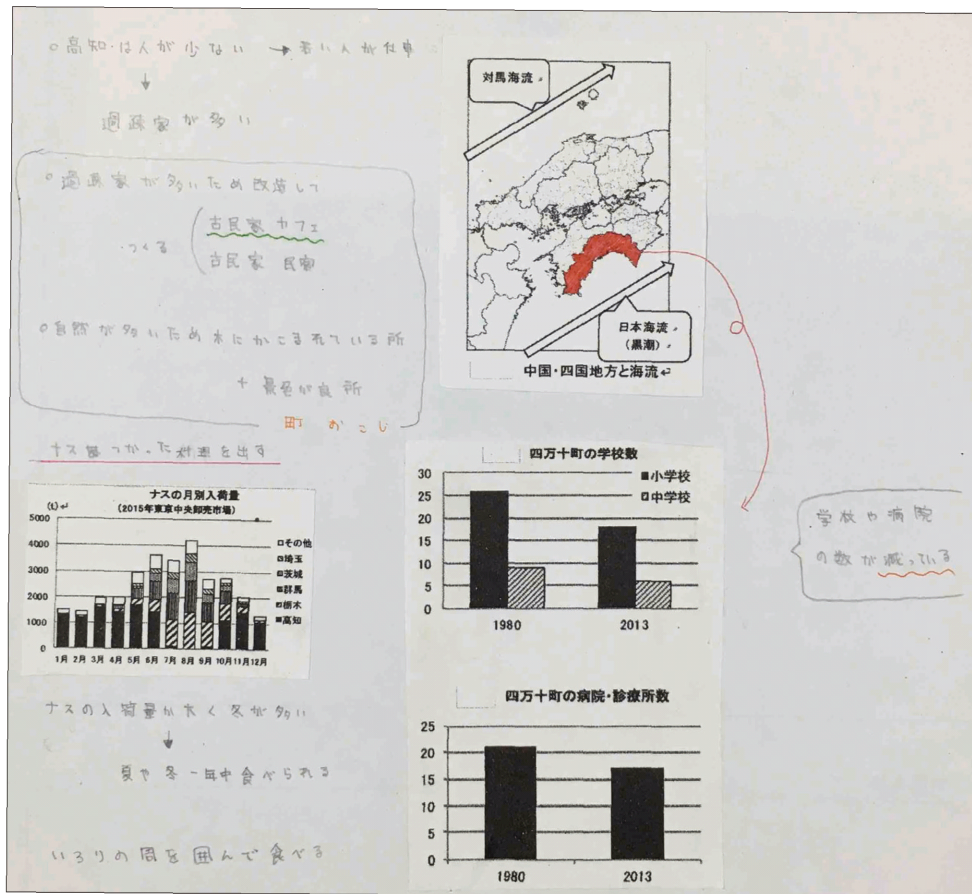


図1 生徒Aの作品

場合は県知事にあてたレポートと設定してあった。そのため、実は市長や県知事がその自治体の特徴や問題について把握していないとは考えにくいと考えた生徒がいた可能性がある。その場合、筆者ら授業者が求めた評価規準を満たす必要性を生徒たちが感じていなかったことも想定される。市長や県知事が、確かにこの解決方法は自身の自治体の特徴や課題をふまえた上で考えられていると納得できるように、特徴や課題を具体的に根拠をあげて示し、そこからつながる解決方法を提示するようにもっと強調する必要があったように思われる。

なお、生徒Aへの相互評価でのコメントには「問題を解決するための方法がとてもやりやすく効果的だと思うし、レポートも見やすい」「とてもキレイにまとめられていてよかったです。古民家を改造して、カフェなどにするという新しい発想があってよかったですと思います！」と書かれていた。生徒Aの古民家カフェで茄子を使った料理を提供するというアイデアの良さには着目できているものの、事前に共有した良いレポートの3観点がほとんど意識されていないことがわかる。また、生徒Aの自己評価も「いろいろな人の考えや、自分の考えとくらべていくのはとても楽しかったです。いろいろな人の考えなども分りやすく、おもしろかった。広島市の再開発や高知の町おこしについてもさまざまな意見も聞けて

よかったです」とされており、活動自体の感想となっていることがわかる。

以上のような生徒Aの作品は、ループリックで「地理的な事象に関する思考力・判断力・表現力」が3、「資料活用の技能」が4と評価された。もし第3時に「先生できた」と言ってきた時のままであれば、こうした評価にはなっていなかっただろう。ここに、部分的にはあるがフィードバックが活かされていることが見て取れる。ただし、ループリックでの評価結果は生徒には伝えていない。コメントで「高知の特徴を活かした良いアイデアですね◎もう少し文章で説明するともっと伝わりやすくなりますね」とフィードバックを返した。

アイデアを褒めたのは、ウィギンズが述べる印象深さに通じていると思われたからである。コメントを返した後、生徒が修正する機会を設けることはできなかったが、本パフォーマンス課題は、日本の諸地域や世界の諸地域にもつながるような視点を有するように設計しており、フィードバックはその後の学習に活かしてもらうこともできるだろう。

続いて、2人目の生徒Bの作品を見てみたい。生徒Bの作品は、ループリックで「地理的な事象に関する思考力・判断力・表現力」が4、「資料活用の技能」が5と比較的高く評価された作品である。まず、広島市の特徴について、平均気温が高いことや市街地の場所、交通の便が良く、工業が発達していることなどを具体的に、資料を貼り付けたり、引用したりして根拠をもって示している。次に、それらの特徴から人口が多くなっていると、特徴と問題をつなげ、ここでも具体的な例を3つ示している。さらに、その3つの問題例を解決するために、問題ごとの解決策を具体的な新聞資料をもとに示すことができている。筆者らが示した良いレポートとするための3観点を意識してレポートができていると捉えられる。

この生徒Bへの相互評価でのコメントには、「とても分かりやすくまとめられていたと思います！良かったよ！」といった漠然としたものがある一方で、「1つ1つの説

広島市より住みやすい場所へ

広島市の特徴

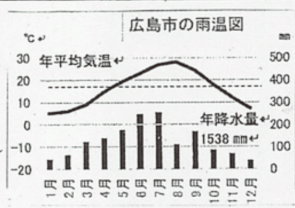
- 雨温図からわかるように、平均気温が16.3℃と過ごしやすい。
- ① P173 図によると、とくに広島湾の近くに市街地がある。
↳ 森林も多い = しんせんな作物がとれる(マツタケカキなど)
- 新幹線や高速道路があり交通の便がよい。(教) P172 ①
- 金属・機械、化学などの工業も発達している。(教) P172 ①

広島市の問題

◦ これらの特徴から人口が多くなり過密問題がおこっている。

例えば… 「3つの例」

- ① 渋滞、通勤ラッシュ
- ② 裁判所や各街の出発機関など、さまざまな機関があつまっていたり、スポーツの競技場や博物館などがあるため住宅不足。
- ③ 都市の中心部を横切る鉄道が人や車の乗り降いで渋滞につながる。商店街を死なせさせてしまう。



①、②、③を解決するために…

②は2つの案があり、地方中核都市として、人の情報の流れの中心ともっとしていくか、場所が広いならたてにスペースをつかって住宅不足をなくす。

①、②は下のようなバイパスをつくり、流れをよくするといいい。

【中国新聞】：西広島バイパス 渋滞距離が半減

通勤ラッシュの写真

新聞資料の貼付

図2 生徒Bの作品

明をくわしく言っていて、とてもわかりやすかったです。根拠もちゃんとあっていいと思います！」といった良いレポートとするための3観点がふまえられたものもあった。こうしたコメントからは、生徒Bの作品を見ることによって、他の生徒にとっても良いレポートの観点が具体的にイメージされたように思われる。

生徒Bの自己評価の記述は、「鉄道を再開発することで、交通渋滞をなくし、人を活発化させたり、スペースをたてにつかうことでもっと人を集中させることで、人の動きを活発化させる」と書かれていた。さらに、生徒Bは初めてパフォーマンス課題に取り組んだ感想として、「どうやったら具体的でわかりやすいレポートになるのか用点をおさえながらまとめていくのが楽しかった」と記していた。このことから、生徒Bは良いレポートの3観点を意識して作品作りに取り組んでおり、その結果、人の移動を活性化させる方向性で、解決策を考えることができたとして自己評価しているといえる。ただし、レポートをよく読むと、解決策の箇所、「地方中核都市として人、物、情報の流れの中心ともっとになっていくか…」

といった記述があり、この部分は解釈次第では一層過密を過熱させるようにも捉えられる。そのため、「資料を使い、特徴、問題、解決のアイデアを具体的にしながらをもってまとめられていますね◎もっと人、もの、情報の流れの中心となったら、余計過密にはなりませんか？」と具体的に考えられるようなフィードバックを行った。

最後に、以上のような実践分析をフィードバックを実施する際の4つの留意点に即して整理し直す中で、成果と課題に触れてみたい。まず、1つめのフィードバックを学習者の行動がどのような結果となったかを具体的に伝える形で行うことについてである。これは、第3時での机間指導時と作品返却時のコメントで意識して行った。ただし、第3時の授業中では、どうしても手が止まっている生徒など一部の生徒への声かけが中

心となったという課題は残る。作品返却時には、生徒Aや生徒Bへのコメントのような形で一人ひとり全員に具体的に事実を伝えるようにした。

次に、2つめのフィードバックを行う時期についてである。この点については、第3時でフィードバックを行なった生徒Aらに対しては、作品に取り組む「過程」でフィードバックを伝えることができ、最終的な作品にもその効果は部分的に表れていた。一方、作品返却時に伝えたコメントでのフィードバックは、事後のフィードバックのようにも思われる。しかしながら、本パフォーマンス課題は、日本の諸地域や世界の諸地域にもつながるような視点を有するように設計しており、その後の学習に活かしてもらうことができれば、これも長期的に見て「過程」の評価と捉えることができよう。

さらに、3つめのスタンダードやモデルを示すことについてである。今回は、良いレポートのための3観点のみを伝えたため、モデルまでは示していない。そのため、生徒Bのように、3観点がうまく伝わった生徒は、それを意識して作品を作ることができていたものの、生徒

Aのように3観点が十分に伝えられなかった生徒も複数見られたことは課題であるといえる。ただし、相互評価でのコメントを見てみると、生徒Bの作品自体が他の生徒にとってのその後の学習のための1つのモデルとなっていた様子もうかがえた。

最後に、印象深さについてである。これについては、結果的に、印象深さを有する創造的な作品が多く出来上がっていたものの、事前に生徒たちに十分にこの点を強調できたとは言い難い。単に学んだ知識や技能を形式的表面的に活用するのではなく、印象深さを持つことの大切さをモデルなどを通じて事前に示すことなどを行うべきであったといえよう。

おわりに

本稿では、パフォーマンス評価の実践においていかに学習者の参加の途を開くことができるのかについて、そのあり方の一端を明らかにすることを目指した。

それにより、まず、ウィギンズが、フィードバックを実施する際には、主に次の4つに留意することが必要であると述べていることを整理した。1つめは、フィードバックを単なる賞賛や叱責、ガイダンスとは区別して、学習者の行動がどのような結果となったかを具体的に伝える形で行うことである。2つめは、フィードバックはパフォーマンスの後のみでなく、過程においても行うことである。一度限りの事後評価ではなく、フィードバックを活かして子どもたちが繰り返し自己調整できるように長期的に評価を行うことが求められている。3つめは、スタンダードやモデルを提示することである。4つめは、子どもたちの学習を型にはめることなく、他者の心をゆさぶるような印象深さを重視して評価を行うことである。

次に、これらの提起を踏まえて筆者らがA中学校において行ったパフォーマンス評価の社会科授業実践を取り上げ、検討した。それは、大学教員による飛び込みでの小単元の授業であるという制約はあったものの、モデルの提示などの課題を明示しつつ、フィードバックを実施する際の留意点を意識した授業のあり方を提起できたことは1つの示唆となるといえよう。

以上のような検討からは、多くの学習者に「質」の高い学びを保障するためには、自身の学習の状況を具体的に把握し、自己評価や自己調整につなげていけるようなフィードバックを継続的に行うことが重要であることがうかがえた。つまり、教育評価の「参加」は「質」を実現するために、切り離すことができないものであるといえる。限られた授業時数の中で、子どもたち一人ひとりに具体的なフィードバックを返すことは確かに困難を伴う場合もあるだろう。しかし、パフォーマンス評価を値踏みや選別の道具とするのではなく、子どもたちに質の高い学力を育成するために位置付けようと思えば、今一

度ウィギンズの提起を思い返し、子どもたちの評価への「参加」の道を開くためにできることを考えていく必要があるといえよう。

注

- 1 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）。
- 2 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計－パフォーマンス評価をどう活かすか－』図書文化社、2016年、p.20。
- 3 詳しくは、石井英真『中教審「答申」を読み解く－新学習指導要領を使いこなす、質の高い授業を創造するために－』（日本標準、2017年）などを参照されたい。
- 4 田中耕治『教育評価』岩波書店、2008年。
- 5 Grant Wiggins, *Educative Assessment: Designing Assessments to Inform and Improve Student Performance*, California: Jossey-Bass, 1998, p.7.
- 6 *Ibid.*, pp.xi-xii (Preface), p.12 etc..
- 7 西岡、前掲書。
- 8 同上書、p.136。また、実践レベルでも、社会科のパフォーマンス評価の実践の中には、三藤らのようにルーブリックを生徒と共有し、自己評価や相互評価を促す事例（三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか－中学校社会科のカリキュラムと授業づくり－』日本標準ブックレット、2010年）や、吉水のように相互評価を実施した後に自己修正の機会を与えるような事例（吉水裕也「高等学校『地理総合』における防災教育の一事例－持続可能な社会をめざす復興まちづくり－」井田仁康編『教科教育におけるESDの実践と課題－地理・歴史・公民・社会科－』古今書院、2017年）などがある。
- 9 西岡、前掲書。
- 10 Grant Wiggins, *op.cit.*, pp.22-24.
- 11 G. ウィギンズ、J. マクタイ著、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計－「逆向き設計」の理論と方法』日本標準、2012年、pp.191-192。
- 12 同上書、p.183。
- 13 本節のフィードバックに関する記述は、特に明記しない限り、Grant Wiggins, *op.cit.* (pp.43-69)に基づく。
- 14 *Ibid.*, p.46.
- 15 Grant Wiggins, *Assessing Student Performance: Exploring the Purpose and Limits of Testing*, California: Jossey-Bass, 1993, p.184.
- 16 *Ibid.*
- 17 Grant Wiggins, *Educative Assessment*, pp.64-67.
- 18 目標、ミニ・パフォーマンス課題などの評価、指導

計画といった単元構想は奥村と宮田の2人で考えた。実際の授業は、第1時、第2時を宮田、第3時を奥村、第4時を奥村と宮田のT.T.といった形で分担して進めた。

- 19 1組では広島県17人、高知県14人、2組では広島県9人、高知県22人、3組では広島県9人、高知県19人という内訳となった。(欠席者等は除く)
- 20 授業後の感想には、「難しかった。過疎問題を解決できる案で、実現可能な案を考えることはむずかしかった。実さいに問題を解決するには、とても大変だとわかった」といったものがあるなど、レポートに取り組むことによって安易に解決できないことを実感した生徒もいた。
- 21 生徒の作品を論文上で公開する点について、学校から許可を得ている。また、保護者に対しては、研究目的での生徒の学習成果の使用および公表について、入学時に学校側から説明がなされ、許可を得ている。